

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	奥野 泰史
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 Impact of the MitraClip G4 System on Routine Practice and Outcomes in Patients with Secondary Mitral Regurgitation. （二次性僧帽弁閉鎖不全症患者における、MitraClip G4 システムの実臨床運用と臨床転帰への影響）
	掲載誌 Circulation Journal 2024;88;531-538
	主査 縄田 寛 副査 小幡 由美 副査 足利 光平
[論文の要旨・価値] 僧帽弁閉鎖不全症と MitraClip に関する研究（主論文） 研究の背景: 二次性僧帽弁閉鎖不全症（FMR）に対し、ガイドラインに沿った薬物治療に加えての MitraClip 治療が予後を改善する可能性が欧米発の COAPT 試験で示唆されていた。本研究は、同氏がスイスのベルン大学に留学中に日本で先行導入された新世代デバイス「MitraClip G4」の効果検証を留学から帰国後に計画した研究である。 新世代デバイス（G4）の特徴: 旧世代である MitraClip G2 のサイズバリエーションが NT, XT の 2 種類であったところに G4 では幅の広いデバイス（XTW, NTW）が追加された。また、弁尖を片方ずつ独立して掴める「独立把持機構」が搭載され、より困難な症例の治療が可能になった。 研究方法（単施設の新デバイス前後比較）: 聖マリアンナ医科大学病院で FMR に対し MitraClip が施行された患者を、旧世代（G2, n=89）群と新世代（G4, n=63）群で比較した。患者背景の調整には「逆確率重み付け法（IPTW）」を用いた。 研究結果: 患者背景としてベースラインは概ね同等だったが、新世代群では、外科的手術リスクが低い患者が相対的に多かった一方で解剖学的に手技が難しい症例の割合が増加した。手技成績は、新世代群では使用クリップ数が少なく（1 クリップで終了する症例が増加）、術後の僧帽弁平均圧較差が有意に低下した。 遠隔臨床成績: 心不全入院と死亡を合わせた複合エンドポイントで、単施設検討で症例数が少ないため統計的有意差はないものの、新世代群に予後改善傾向が見られた。G4 の導入により、僧帽弁狭窄の合併を減らしながら幅広い背景の患者に対する治療が可能になったと考えられた。	
[審査概要] 主査 縄田寛（心臓血管外科学指導教授）、副査 小幡由美（麻酔学准教授）、足利光平（スポーツ医学准教授）による審査を、明石嘉浩指導教授を含む循環器内科医 4 名の同席のもと 2025 年 12 月 10 日 18 時より審査を実施した。自己紹介に始まり実臨床におけるクリニカルクエストを解決するために海外留学し、数多くの論文を執筆したことが紹介された後、主論文 1 編、副論文 2 編全てについての包括的な研究成果報告がなされ、最後に今後の自身の臨床活動と研究に対する考え方についても言及された。約 35 分のプレゼンテーションの後、20 分の質疑応答、引き続いて英語試験の実施をもって審査は終了した。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 留学前に 6 編、海外留学中に 26 編の原著論文を執筆しており、帰国後も精力的に論文を発表していて研究遂行能力に疑いの余地はない。主論文ならびに副論文に関連して、経カテーテル的弁膜症治療の対象となる構造的な心臓弁膜疾患の臨床成績に関する自らの研究結果への洞察や他施設からの論文への考察を求められると、未使用スライドも提示しながら当該分野に関する豊富な知識と鋭い観察眼をもって明快な回答を示した。英語読解力審査として、副論文に対する Editorial の一部（段落 2 つ分）を指定し、その場で音読並びに和訳を求めた。流ちょうな音読と的確な和訳を示され、優れた英語能力を有していると判断された。 奥野泰史氏は研究遂行能力、専門的学識、語学力の全ての点において極めて優れた力を示され、最高水準で学位授与に値するとの意見で全員一致した。	